【成果情報名】センター産アユの継代数の違いによる釣られやすさの比較

【要約】山梨県水産技術センター本所で5世代（以下F5群）および9世代（以下F9群）継代飼育された駿河湾産アユについて、同数を放流した河川で投網および友釣りによる捕獲実験を行い、種苗特性評価を行った。F5群が占めた比率は、投網による捕獲で64%であり、放流後の定着率はF5群のほうが有意に高かった。一方、友釣りによる捕獲ではF5群が占めた比率は59%であり、投網と同程度の比率であった。以上の結果から、駿河湾産アユでは継代を重ねると定着率が下がることにより、種苗性が低下すると結論づけられた。

【担当】山梨県水産技術センター・増殖スタッフ:　坪井潤一

【分類】研究

【課題の要請元】センター産アユを放流している県内各漁協

【背景・ねらい】
ダムや魚類の遡上が不可能な堰堤の上流域では、釣り対象となるアユのほぼ100%が放流種苗である。しかし、養殖環境で生まれ育った魚を親にして採卵する継代飼育は、野性味が薄れ養殖しやすくなる一方、放流後の定着率(生残率)が下がったり、なわばり形成能が低下したりして、友釣で釣られにくなるといった種苗性の低下が危惧される。本研究では水産技術センター 本所で５世代(以下F5群)および９世代継代飼育(以下F9群)された駿河湾産養殖アユについて、河川放流後に投網および友釣りによる捕獲実験を行い、定着率と釣ら

【成果の内容・特徴】
　2010年6月4日にF5群、F9群を、それぞれ1万匹ずつ放流した。放流場所はセンター前の荒川である。6月26日から9月22日にかけて捕獲実験をおこなった。結果は、F5群が占めた比率は、投網による捕獲で64%であり、放流後の定着率（生残率）はF5群のほうが有意に高かった（表1）。一方、友釣りによる捕獲では59%をF5群が占め、投網と同程度の比率であった（表2）。言い換えると、川での定着率（生残率）は、F5群のほうが高く、釣られやすさはF5,9各群で同程度であった。また、冷水病が7月に発生したが、大量斃死はみられず、両群と

【成果の活用上の留意点】
海産系では継代を重ねると、野性味が薄れ養殖しやすくなる一方、放流後の定着率が下がることにより、種苗性が低下すると結論づけられた。当所では今年度、駿河湾で捕獲された天然魚から採卵したF1群を種苗として導入しており、来年度も同様の試験を実施することにより、F1群とF6群で種苗性を比較検討したい。

【期待される効果】
センター産放流アユの種苗性向上に資する。

【具体的データ】

表1. 水産技術センター本所で5世代（F5群）および9世代継代飼育（F9群）された駿河湾産養殖アユの放流個体数と投網による捕獲個体数

	F5群	F9群
放流個体数	10000	10000
投網による捕獲個体数	74	41

G検定, p = 0.002

表2. F5群とF9群の投網および友釣りによる捕獲個体数. なお、友釣り個体数には一般の

	F5群	F9群
投網	74	41
友釣り	63	43

G検定, p = 0.454

表3. F5群とF9群の投網および友釣りによる捕獲された個体の冷水病の症状の有無.

	F5群	F9群
冷水病症状有り	6	7
冷水病症状無し	31	53

G検定, p = 0.535

【その他】
研究課題名：センター産アユの継代数の違いによる釣られやすさの比較
予算区分　：県単
研究期間　：平成22年度